

「がん経験の影響」で恋愛に踏み出せない「性の悩みはどこに相談したらいいのか」。思春期から若年成人のがん患者「AYA（Adolescent and Young Adult 1t）世代」が抱える性の不安や悩みを交流するオンラインイベントが、3月19日に開かれました。性機能や親密な関係の中での影響、求められる支援を考えました。（松浦裕輝）

A Y A 世 代 の 性 の 懶 み & ガン

イベントを主催したのは、NPO法人キャンサーネットジャパンです。

不安や孤独感
荷下ろとして
昭和大学保健医学部
授渡邊知映さんは、A
A世代の悩みの特徴や、
療が与える心身への影響
報告しました。



安心して話せる社会へ どう支援



NPOがオンライン交流

また、治療の影響は個別性が高く、「症状が起きるのとは全体の3割程度」と強調。手術痕や治療による外見上の変化を見られたり、触れられたりすることへの恐怖や抵抗感、抗がん剤治療による倦怠感や吐き気、ホルモンの変化で気持ちが

性生活に向かないなど、その影響を報告しました。渡邊さんは、セックスだけではなく、スキンシップや趣味を楽しむなど「新しい関係性を楽しむ中で、セックスに対しても少しずつハドルが低くなったりという人もいる」とい、「自分はどうしてほしいのか」を話してみることを勧めます。「大切なとの結びつきは、がんという病気の不安や孤独感を荷下ろししてくれる。医療者と患者、パートナーが安心して話せる社会をつくるのが大切です」

佐藤さんは現在、後遺症のことなどを「考えられず」に「た」と振り返りました。20歳で精巣腫瘍と診断され、化学療法の実施を決めました。性に関しては家族や友人・恋人にも「言いづらい」と感じています。妊娠性(妊娠する力・させる力)温存のための精子凍結について医師に「直前に聞かれて」、慌てて一時退院して行いました。「病気そのもののショックがあったのか、それまでに医師から説明された記憶がないんです」

色体へのダメージの回復も、同程度の時間が必要です。子どもを望む場合、治療前の妊娠性温存や治療後の不妊治療で対処できるものも多いといい「検査を受け、まずは現状の確認」と呼びかけました。

男性不妊専門の医師・
村寧さんは、男性へのがん
治療の影響を報告しまし
た。精子の元となる細胞
抗がん剤や放射線による
影響を受けやすく、治療開始
後1～2カ月で精子が減
少し、回復には1～3年を
します。精子のDNAや

湯田さんは海外の調査を紹介。外形上の変化や性機能の低下、勃起・射精障害などの影響でパートナーとの親密度が低くなるなど、「がん治療は性機能に負のインパクトを与える」と指摘。性機能障害はがんでもなくとも話しつぶつ悩んでいる人も多く、一人ではない。あきらめずに情報入手してほしい」と話しました。